

2005年にイタリアの Riva del Garda で第7回 International Pragmatics Conference が行われたが、*Multilingua* と *Journal of Pragmatics* の両誌で、その大会で発表された論文の特集をしている。会議に参加した人も参加できなかった人も、大会の内容の一部を知る機会として、または、大会を振り返るためにも、一読を勧める。

*Multilingua*(25-3)では様々な言語社会において、どのような形でポライトネスが表れているか、実際のやり取りの中から実証している。一方、*Journal of Pragmatics*(39)においては、アイデンティティーの概念化といったより理論的なものを扱っている。以下は、それぞれの雑誌の巻頭にある2つのレビュー論文である。双方とも最近の語用論のトレンドを反映して、語用論における各種の要因(face, politeness, identityなど)をつながりのある文脈なしの静的な概念ではなく、推論的(discursive)な現象であると捉えている。

Kasper, Gabriele. (2006). Politeness in interaction: Introduction to the Special Issue. *Multilingua*, 25, 243-248.

Kasper は、まず、(DCT などの)意図的に引き出された言語資料の限界を論じ、ディスコースレベルのデータ収集、及び分析を用いた研究の理論的根拠を述べている。更に、Brown and Levinson に代表されるポライトネスの普遍性に関わる論争点に関し、他の要因、例えば 'discernment' など、を交えて言及している。この巻の各論文の理論的背景をわかりやすく論じていることから、それらを読む前に一読しておくことを勧める。

Spencer-Oatey, Helen. (2007). Editorial; Identity, face and (im)politeness. *Journal of Pragmatics* 39, pp. 635-638.

Spencer-Oatey は、特集号のそれぞれの論文を、各著者がどのような形でアイデンティティーの概念にたいしてのポライトネスやフェイスの現象を分析しているか、簡潔に論評している。

以下の2つの論文はこの巻に収録されている。

Spencer-Oatey, H. (2007). Theories of identity and the analysis of face. *Journal of Pragmatics* 39, pp. 639-656.

語用論を学んだものなら、face の概念は、最初に Goffman、更には Brown and Levinson のポライトネス理論などを通して、身近なものである。社会心理学においても、face, self, identity などの概念は、幅広く研究されてきた。Spencer-Oatey は、それらに関係する様々な理論を論評し、異文化交流時におけるミスコミュニケーションの例を引きながら、face は多面的な概念であり、1つの面だけを論証しても、推論的な現象としての face の理解は十分には得られないと示唆している。

Haugh, M. (2007). Emic conceptualizations of (im)politeness and face in Japanese: Implications for the discursive negotiation of second language learner identities. *Journal of Pragmatics* 39, pp. 657-680.

これは、日本語の第二言語学習者及び日本において自分のアイデンティティーの確立に努力している人たち全体に関連している論文である。Haugh は日本語学習者が日本語の環境においてアイデンティティーを確立するには、日本語においての各種の社会心理学的な現象を概念として習得する必要があると論じている。Haugh によると、日本語においては、place の概念が、face や (im)politeness の現象の根底にある。